

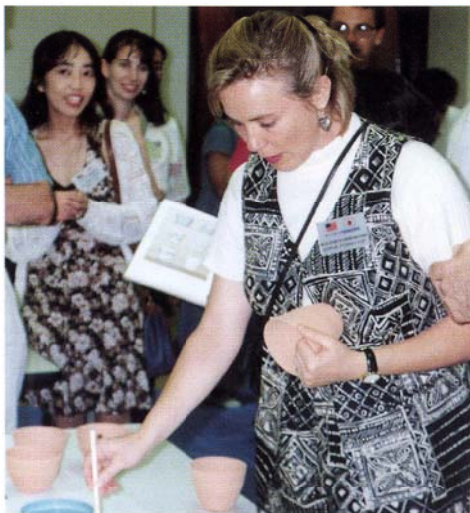
●トピック

オースチン市親善訪問団来館

8月3～6日に大分市の姉妹都市であるアメリカのオースチン市から、親善訪問使節団が来分されました。使節団一行は8月4日に資料館に来館され、施設を見学。その後、日本の伝統文化に触れていたどころと、陶芸教室を楽しんでもらいました。

陶芸教室では絵付けに挑戦。講師の東圭子氏より説明を受けた後、見本の図録などを参考にしながら、一行は興味深々な様子で絵付けに取り組んでいました。奮闘1時間後、楽しい作品ができたようです。作品は窯入れされ、完成。焼き上がった茶碗は無事オースチン市へと送られました。

一時間余りの慌ただしい陶芸教室でしたが、日本の伝統文化の一端に触れていただくことができ、資料館としても嬉しい限りです。



●行事案内

★秋季特別展

「城のある風景—城郭物語」

開催期間 10月27日～11月26日

城の歴史を、大分市民に馴染み深い府内城を中心に紹介する。

★ふるさとの歴史再発見「民俗のコース」

日時 10～12月 第1・2・3土曜日

定員 高校生以上 70名

内容 祭や口承文芸などの民俗事例を通じて、日本人の心象を学んでもらう。

★ミュージアムシアター

日時 10月28日 11時、13時、15時

内容 「日本人はどこからきたのか」[岩宿の発見]

●編集後記

昨年に引き続き記録的な猛暑となった夏も去り、気持ちのよい秋風の吹く季節となりました。今夏もジュニア講座など行事が目白押しで、夏バテ気味です。何をしてもまず体力だと痛感

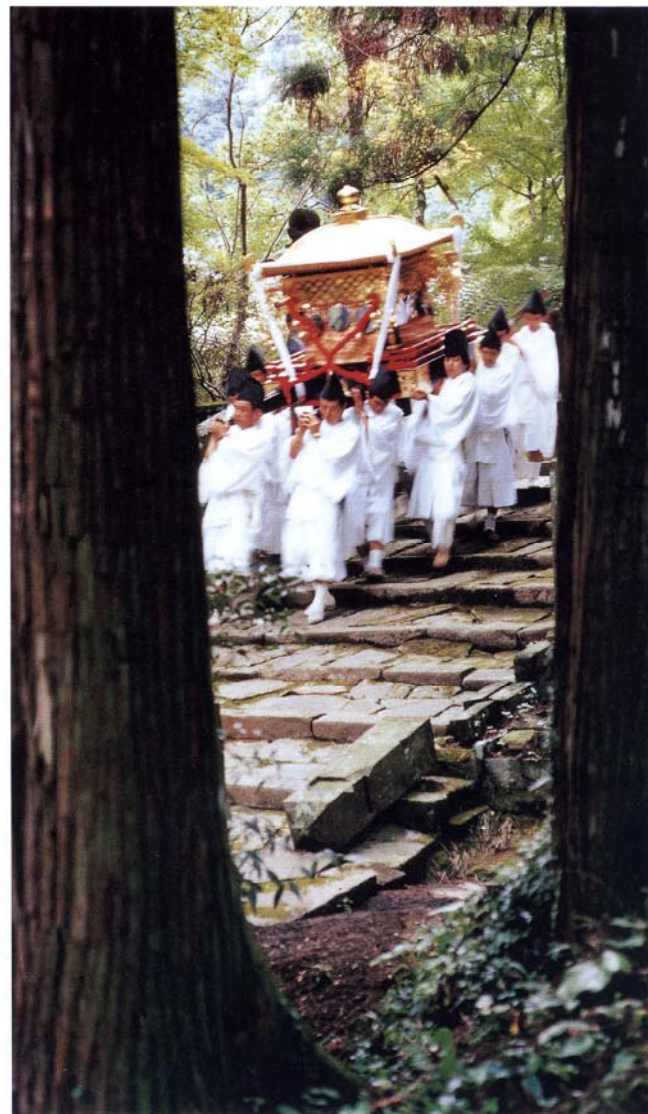
させられました。

つかの間の涼しさに一息つけば、秋季特別展の季節です。今年度のテーマはお城。体力の秋となりそうです。



大分市 歴史資料館ニュース

OITA CITY MUSEUM NEWS



柞原八幡宮放生会 神輿のオサガリ

資料館ニュース No.32

発行 1995.10.20

大分市歴史資料館

大分市大字国分960番地の1
〒870 ☎(0975) 49-0880

夏休みジュニア歴史講座

7月25日～28日までの4日間、夏休みジュニア歴史講座を行いました。今年度から1日づつ考古・歴史・民俗の各分野について、体験しながら学習する講座としました。

第1日目は土器の洗浄と復元。みんな土器に触れるのが初めてで、土器を楽しそうに洗っていました。また、その土器が復元できると喜びは倍増したようです。2日目は疑似検地体験。まず、本物の検地帳を見て、書かれている数字の意味を解説、その後史跡公園内の面積を計り、検地帳にまとめました。3日目は国分地区の猪原種記さんを招いて、藁ぞうり作り。縦糸を引っ張るのに相当悪戦苦闘していましたが、それでも1組のぞうりを作りあげました。最終日は下郡遺跡での体験発掘。炎天下のもと、一生懸命に掘り、土器が見つかるたびに歓声があがっていました。

みんな、体験する喜びを感じてくれたようです。来年もさらに工夫し、大分の生活や歴史に触れることができる講座にしたいと思っています。



●表紙紹介

柞原八幡宮放生会 ほうじょうえ 神輿のオサガリ

放生会は生物が囚われているのを解放して自由にする儀式で、大分市内では柞原八幡宮が毎年9月14・15日に行っています。このとき、柞原八幡宮から3体の神輿が西大分の生石濱にある御旅所にくぐります。生石濱に神輿が着くと、昔は多数の魚を海に放したといいます。

放生会といってピンとこない方には、浜の市のお祭といったほうがわかりやすいかも知れません。浜の市は神輿が柞原八幡宮に帰るまでの10日間、生石濱に立つ市で、昔から大きなにぎわいを見せています。市で売られるシキシ餅と一文人形は有名です。



浜の市で売られる一文人形

府内城(3) 府内城の縄張り

江戸時代の城郭は、軍事拠点であると共に、政治の拠点ともなる場所です。日本でも古代から中国思想である風水思想に基づき四神相応の地に、都や墓などを造っていました。江戸時代の軍書書にも城の選地にあたっては四神相応の地を選ぶ様に書かれています。府内城も後世の記録である「豊府聞書」に「東大河洋々流水漲常南田地畦々群民遊之、西平地遙々江河流之、北蒼海漫々鯨鯢踊之」「左青龍^龍右白虎^虎前朱雀^{朱雀}後玄武^{玄武}四神相応地也」と記載されています。軍書書「武教全書」に、繁盛の地として「北高く南低く北南へ長く続く東南西に水ある」地、また四神相応の地として「東有小河田沢謂青龍、南有流水謂朱雀、西有道士謂白虎、北有山林謂玄武」とするのからすると、若干こじつけ気味なところがあります。

次頁の図は現在の1/500の測量図をもとに、「府内絵図」(大分大学図書館蔵)の数値に基づいて新しく引いた推定復元の府内城図面(二之丸まで)に十間方眼を被せた図面です。数値を忠実に表現したのですが、数値が折り合わない所では最良と思われる点で辻つまを合わせた部分があり再検討の余地は多く、本当は発掘結果によって図面を引くのがベストであるのは言うまでもありません。しかし、従来公表されている図面の多くは「府内絵図」をそのままトレースしたものであり現状ではよりベターな図面といえます。

城を縄張りするに当たっては四神相応の地に従って基準を決める必要があります。府内城の場合は、天守閣から大手口廊下橋を結ぶ線がそれに当たります。その中軸線によって本丸は所謂天守丸とその他に分割されます。東西軸は天守閣西南隅を交点として直角に引いた線で、天守丸の北を限り、また本丸を南北に二分します。府内城は全てこの中軸線を基準にして縄張りされたと考えられます。

この中軸線はどの様に決められたのでしょうか。

この様な事に関しては記録として残る事はまずありません。「豊府聞書」等の記録には、福原直高が生嶋新助と共に上野の飯盛塚に登って城ト(城の位置を決めた)をしたと書かれています。先の南北軸を南にのぼすと丁度上野丘高校へ行く道の登り口辺りに在る歳神社という神社に当たり、本殿の裏には古墳のような土盛りが在ります。ここから北へまっすぐ行くと府内城の大手にあたるという言い伝えがあり、府内城縄張りの基準の一つであった可能性があります。

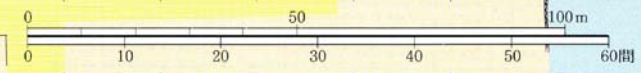
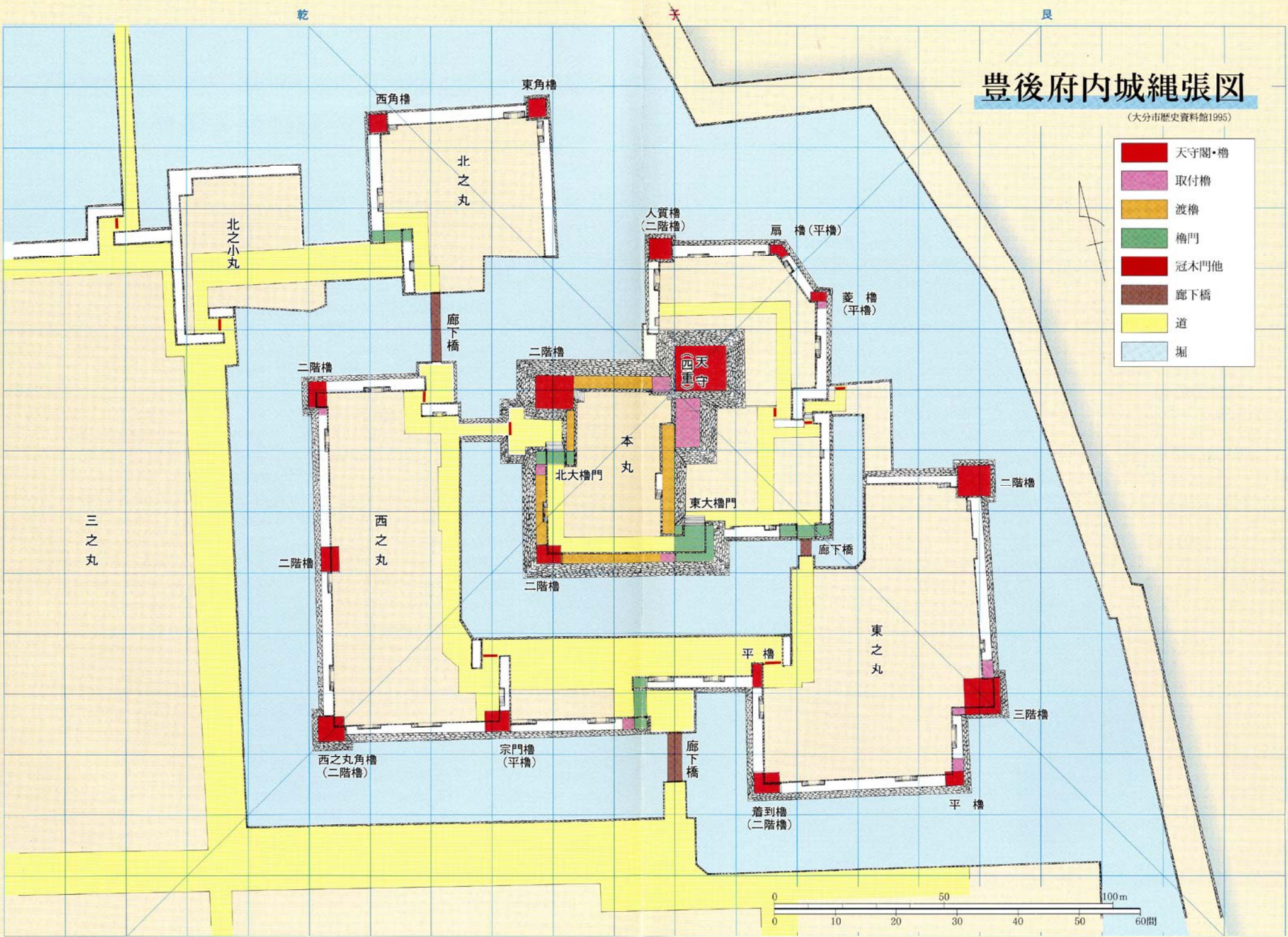
先に中心軸は天守閣から大手を通る事を見ましたが、二本の軸線の交点から45度の線を引くと、坤巽良乾の夫々の線上に重要な櫓が乗っています。坤(西南)に西之丸隅櫓、巽(東南)に東之丸三階櫓、艮(東北)は扇櫓・菱櫓で角切りされており(鬼門除?)、乾(西北)には北之丸(山里)の西隅櫓が配置されています。三階櫓は天守閣に次ぐ重要な櫓であり、西之丸隅櫓は防衛上重要な位置にあり、幕末には両側に続く土塀を大砲などが使用できるように改修しています。北之丸の西隅櫓は、馬出虎口として重要な北之丸の櫓です。

つぎに郭の配置は、本丸は交点を中心に四等分した内の乾部分を欠き中心軸の交点を強調しています。坤は天守丸として他の郭より一段と高く石垣高は水面より六間と他の三間より高く天守台と共に一際目立たせています。西之丸は子午線(南北軸)からして、天守丸の2倍、東之丸は本丸南郭の2倍ですが、単調さを避けるために卯酉線(東西軸)から15間程南にずらして縄張りをしています。従って大手の着到櫓は南に張り出し好位置を占める事になります。「武教全書」では二之丸は本丸の二倍、三之丸は二之丸の二倍にする事を標準とするとされており、それに沿った縄張りと言う事が出来ます。(以下次号)

豊後府内城縄張図

(大分市歴史資料館1995)

- 天守閣・櫓
- 取付櫓
- 渡櫓
- 櫓門
- 冠木門他
- 廊下橋
- 道
- 堀

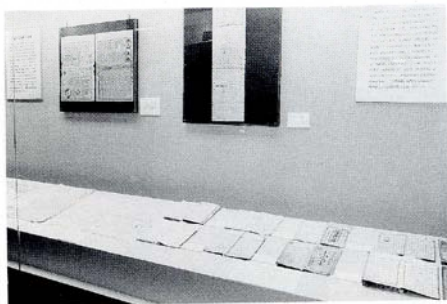


おおいたの文明開化

平成7年7月8日～9月24日

本年度の第2回テーマ展として、7月8日～9月24日の期間、特別展示室を会場に「おおいたの文明開化」展を開催しました。今回は、明治から大正初期までの大分の「近代化」の歩みを、廃藩置県以後の県政の動きや近代教育・思想の普及・交通網の発達的面から紹介してみました。

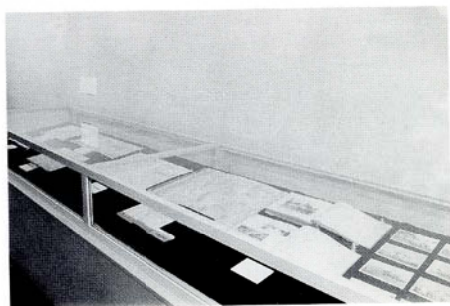
最初の「県政のはじまり」のコーナーでは、明治4年11月、同年7月の廃藩置県で成立した行政区（当初3府302県を数えた）が3府72県に大幅に整理されたのを機に、大分県が誕生したこと。しかしこのときは旧豊後国を範囲とするもので、明治9年8月の再整理で豊前宇佐郡・同下毛郡の二郡が新たに当県へ編入され、こんにちの県域が確定をみたこと。また、初代長官森下景端の指揮下、県下の地方行政組織としての大区・小区制が明治5年3月に施行され、この組織もとに戸籍の作成が進められて56万2156人の県民が新たに「国民」として把握されたこと。さらに地租改正事業も行われ、15万2698枚の地券が県下の地主に対して配布され、その地価総額2328万1426円33銭3厘の3%に当たる69万8442円が中央政府の国家財源とされ、「殖産興業」政策等の資金とされていったことなどを、当時県下で作成された戸籍や地券・地引絵図等の資料をとおして紹介しました。その他、大区・小区制の廃止から郡・町村制の



復活、その後の町村の統廃合、さらに明治44年県都「大分市」の誕生までの動きについても御覧いただきました。

次の「教育・思想の近代化」のコーナーでは、明治5年8月「学制」公布後に県下の小学校で実際に使用された明治6年～11年の教科書や、国権・民権・中立の立場でそれぞれに論陣を張った明治20年代の新聞、『豊州新報』・『大分新聞』・『新大分』を展示し、それらが西洋の科学や文化・思想の県民への普及に果たした役割などを紹介しました。

最後の「近代交通網の発達」のコーナーでは、全国的にやや遅れて明治44年小倉から現大分市まで鉄道（豊州線（現日豊本線））が開通し、以降、大正3年に大分一中判田間の犬飼線（現豊肥線）ができ、大分駅を起点に鉄道網の整備が行われていったこと。また、同年新大分港が完成し、大正7年には明治33年別府～大分間を九州で初めて走った路面電車がその軌道を大分駅まで延長するなど、明治末～大正初年にかけて、県下の海陸の交通体系の整備が急速に進められていったことや、これをうけて、大正10年第14回九州沖縄八県連合共進会が大分市を会場に実施され、期間中県内外から98万910人が訪れて賑わったことなどを紹介いたしました。



上野遺跡とその周辺で出土した遺物

大分市街地の南に西から東へ延びる上野の台地がある。その東端にある上野遺跡からは、百済系古瓦が出土することが知られています。今回紹介する遺物（1～8）はこの遺跡の南の亀山宏氏の宅地から1970年頃出土した坏と土弾です。坏は底が回転ヘラ削りされ、8世紀後半から9世紀初めのものと考えられます。また土弾も坏と同じ粘土でつくられており、出土状態から同時期の遺物と思われる。なお、瓦は当館で展示している上野遺跡出土のものです。

